

Ⅲ 今 村 遺 跡

目 次

第 I 章 調査経過と調査団の構成	165
1. 調査経過	165
2. 調査団の構成	165
第 II 章 遺跡の立地と環境	166
第 III 章 調査の概要	166
第 IV 章 検出遺構と遺物	169
1 号竪穴(第 3 図)	169
2 号竪穴(第 5 図)	171
3 号竪穴(第 7 図)	173
表土・包含層出土遺物(8～9 図)	175

挿図目次

第 1 図 今村遺跡と周辺地形図 (1/3000)	167
第 2 図 今村遺跡遺構配置図 (1/400)	168
第 3 図 今村遺跡 1 号竪穴実測図 (1/60)	169
第 4 図 今村遺跡 1 号竪穴出土遺物実測図 (1/3)	170
第 5 図 今村遺跡 2 号竪穴実測図 (1/60)	171
第 6 図 今村遺跡 2 号竪穴出土遺物実測図 (1/3)	172
第 7 図 今村遺跡 3 号竪穴実測図 (1/60)	173
第 8 図 今村遺跡 3 号竪穴 (1.2) 今村一括出土遺物(3～11)実測図 (1/3)	174
第 9 図 今村遺跡包含層出土遺物実測図 (1/3)	175

図版目次

図版 1	今村遺跡 1 号竪穴 (北側より)	176
図版 2	今村遺跡 1 号竪穴 (西側より)	176
図版 3	今村遺跡 1 号竪穴の竈 (北側より)	177
図版 4	今村遺跡 2 号竪穴 (西側より)	177
図版 5	今村遺跡 3 号竪穴 (北側より)	178
図版 6	今村遺跡 1 号竪穴出土遺物	179
図版 7	今村遺跡 2 号竪穴出土遺物	180
図版 8	今村遺跡 3 号竪穴 (1.2)、今村遺跡包含層 (4.5.7~9) 出土遺物	181
図版 9	今村遺跡包含層出土遺物	182

第 I 章 調査経過と調査団の構成

1、調査経過

大分空港道路は国東半島南端基部の日出町大字大神字会下から、国東半島東端の安岐町の大分空港までの約204kmの区間である。大分県教育委員会では道路建設に先立って、昭和58年に計画区内の分布調査を行い、同62年には遺跡のありそうなNO.1地点からNO.14地点の試掘調査を実施し、当該区域に6箇所遺跡を確認している。

日出町の今村遺跡はNO.2地点に相当し、昭和63年に道路幅約30m、長さ約70mの約2,100㎡を発掘し調査を完了している。その結果、今村遺跡では古墳時代中頃の3基の竪穴住居跡を検出し、当該期の基礎資料を得ることができた。

2、調査団の構成

今村遺跡における昭和63年度の調査団の構成は次のとおりである。

調査主体 大分県教育委員会

調査指導 賀川光夫（別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員）

西谷 正（九州大学教授）

調査員 清水宗昭（大分県教育庁文化課文化財調査第一係長・現主幹兼文化財調査第一係長）

栗田勝弘（大分県教育庁文化課主任・現主査）

丸山啓子（大分県教育庁文化課・現安岐町教育委員会）

猪 薫（大分県教育庁文化課・現三光中学校）

調査事務 今永一成（大分県教育庁文化課庶務係長・現中津教育事務所課長）

西 哲弘（大分県教育庁文化課主任・現主査）

調査補助員 宮下貴浩（別府大学学生・現鹿児島県金峰町教育委員会）

調査作業員

諸富安子、荒巻富子、長谷川純子、阿部トヨ、阿部優子、小田盛栄、岩崎シゲ子、長野君子、川野ヤスエ、青柳カズ子、北村チヨ子、河野ミツ子、長野キクエ、藤田厚子、長野カズ子、芝尾マツエ、藤本孝子、上野明美、森本薫、赤尾マスヨ、芝生シゲ子、田畑徳久、笠置和枝、笠置エツ子（順不同）

調査整理 坂本洋子

Ⅱ章 遺跡の立地と環境

今村遺跡は日出町大字藤原字今村に所在する古墳時代中期の集落跡である。

遺跡は大分空港道路の始点にあたる第1地点会下遺跡の約250m北側、緩傾斜地の第2地点に当る。遺跡は標高30m～34mの範囲内に位置し、発掘調査の面積は道路幅30mで長さ70mの約2,100㎡である。

発掘調査区の南側約50mには小河川の神川が東方へ向かって流れており、小川の周辺部は水田である。遺跡は南斜面部の段々畑の一端に残存していた。

発掘調査の結果、古墳時代中期に位置する3基の竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代の集落跡は日出町では今村遺跡の他はあまり顕著ではない。墳墓では今村遺跡の西側約1.2kmに、直弧文を施す鹿角製刀装具を出土した鰐沢古墳群がある。また、今村遺跡の北西部約0.8kmには横穴式石室の穴観音古墳があり、同南東部の1.4kmには伊勢森古墳群が群集している。

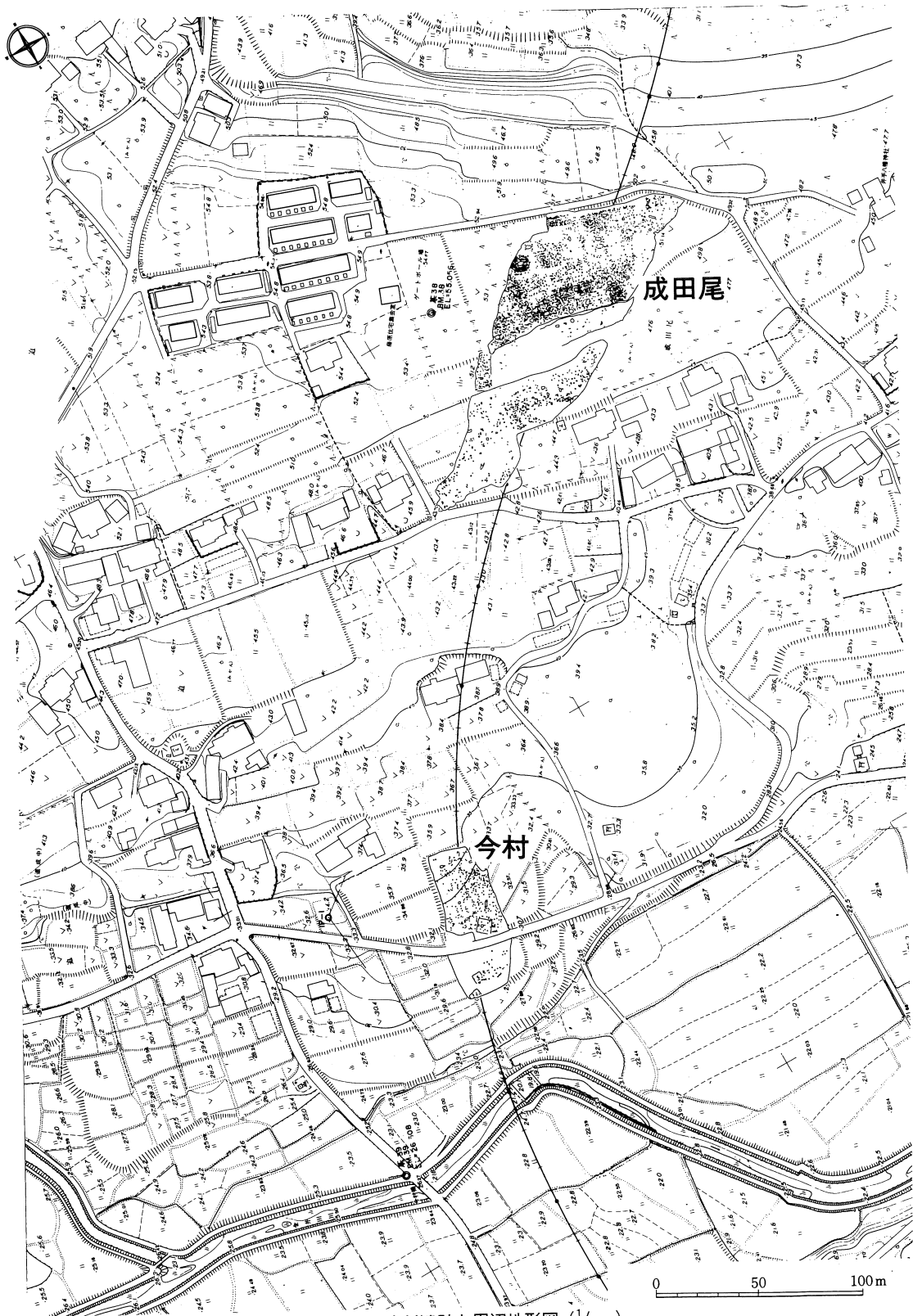
今村遺跡は5世紀代の集落跡であり、鰐沢古墳群等が当該期の墳墓として比定できそうである。

Ⅲ章 調査の概要

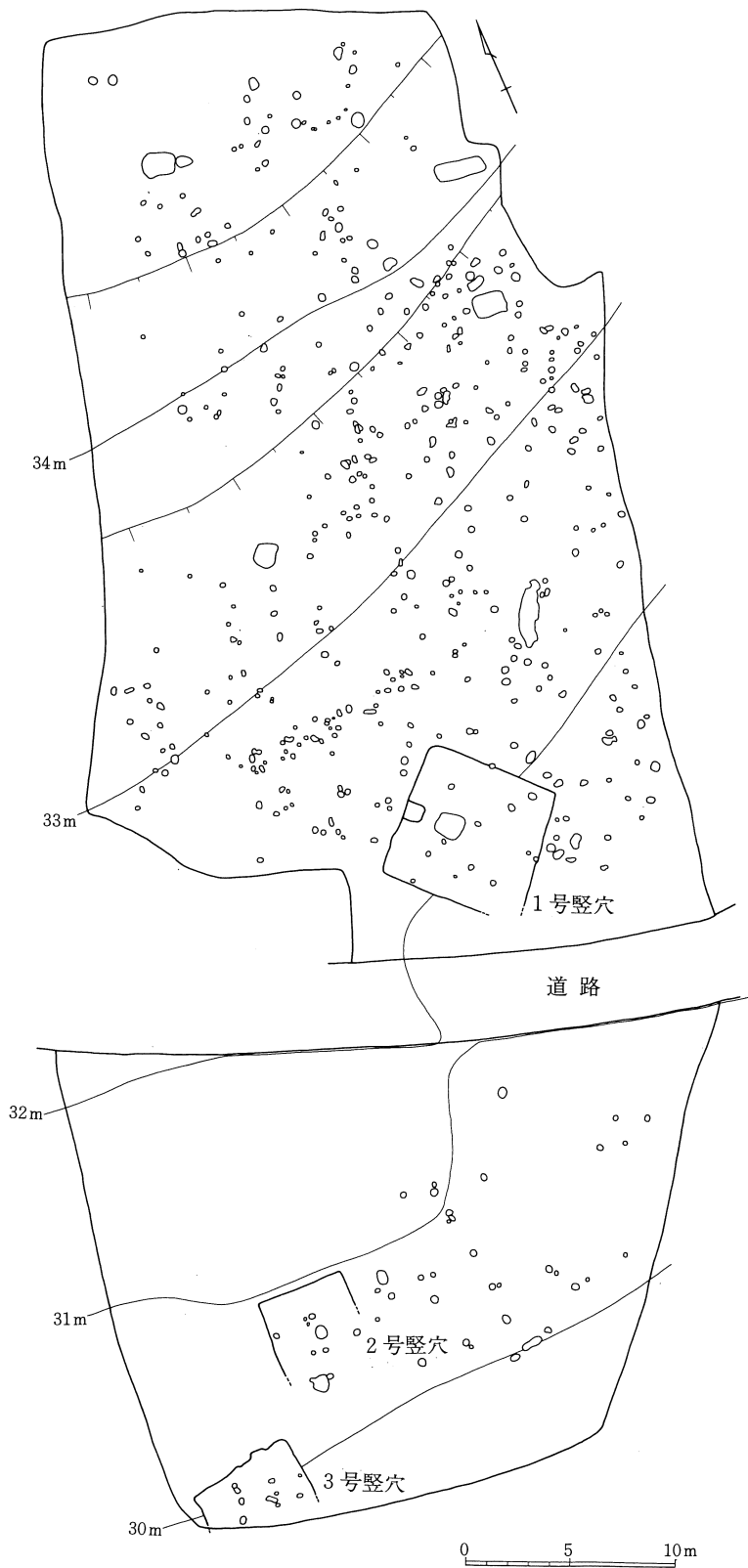
今村遺跡は発掘調査面積約2,100㎡であり、南緩傾斜面の標高30m～34mの範囲内に収まる。検出された遺構と遺物は、主に古墳時代中期に相当する5世紀代の竪穴と土器群であった。調査区内には数多くの柱穴群と推量されるピット群が遺存するが、時期等は不明である。古墳時代の竪穴は3基であり、内1号竪穴には竪穴住居跡の北壁中央にカマドを持つものであった。また2号竪穴は、2本主柱穴を持ち、柱間に浅い土坑炉を配するものである。一方、3号炉は後世の造成で大半が削平を受けており、全体の様相は把握できないが、4本主柱穴に囲まれた中心部には、地床炉と推察できる焼土塊が検出されている。

出土遺物としては、各々の竪穴内や、表土・包含層中より、古墳時代に相当する土師器をはじめ、8世紀後半～9世紀前半の遺物等も散見できる。また、包含層内より縄文前期の貝殻条痕文土器片等も少量検出されている。

今村遺跡は後世の畑地造成で削平が著しく全体的には残存状態は良好ではない。



第1図 今村遺跡と周辺地形図 (1/3000)

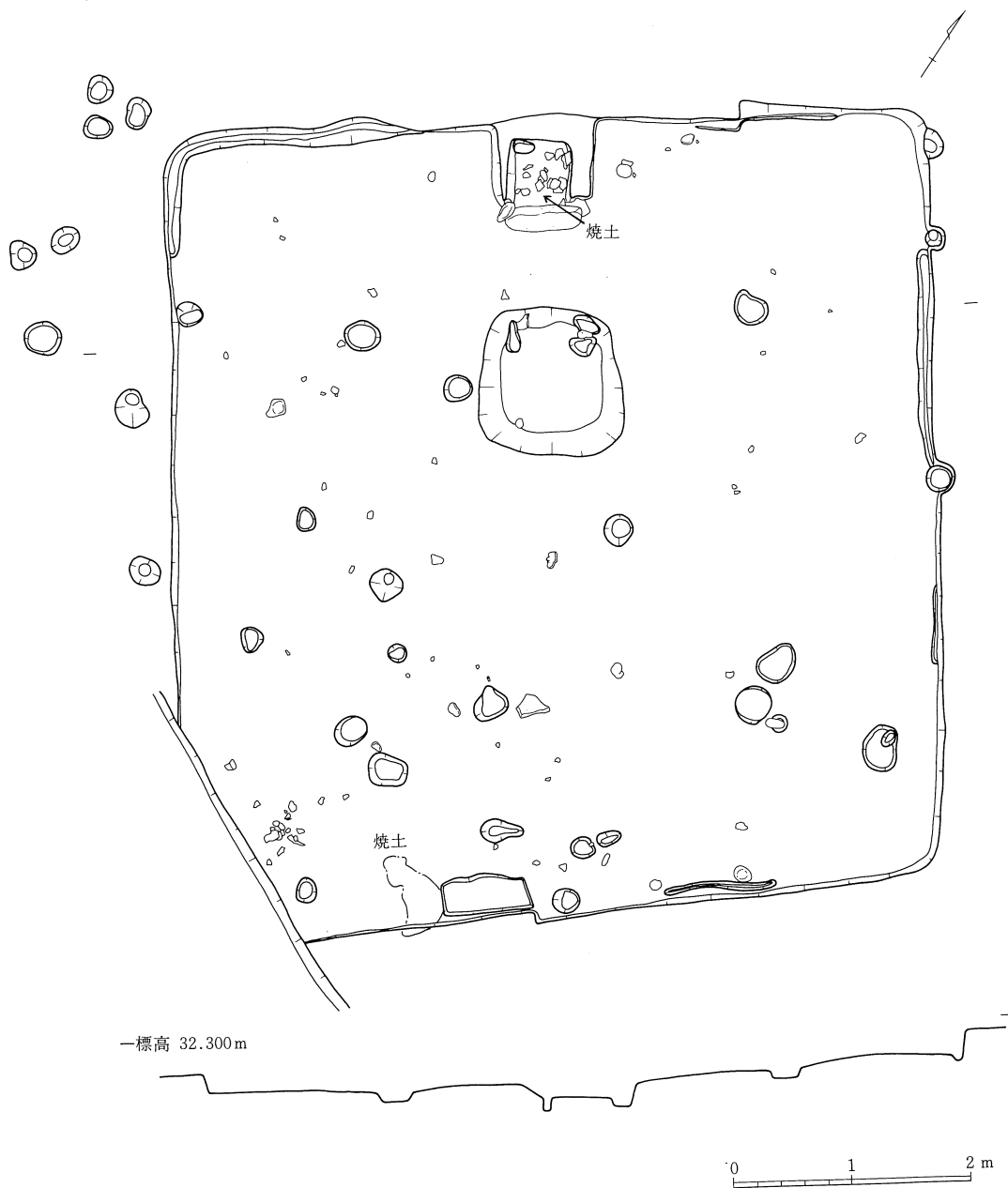


第2図 今村遺跡遺構配置図 (1/400)

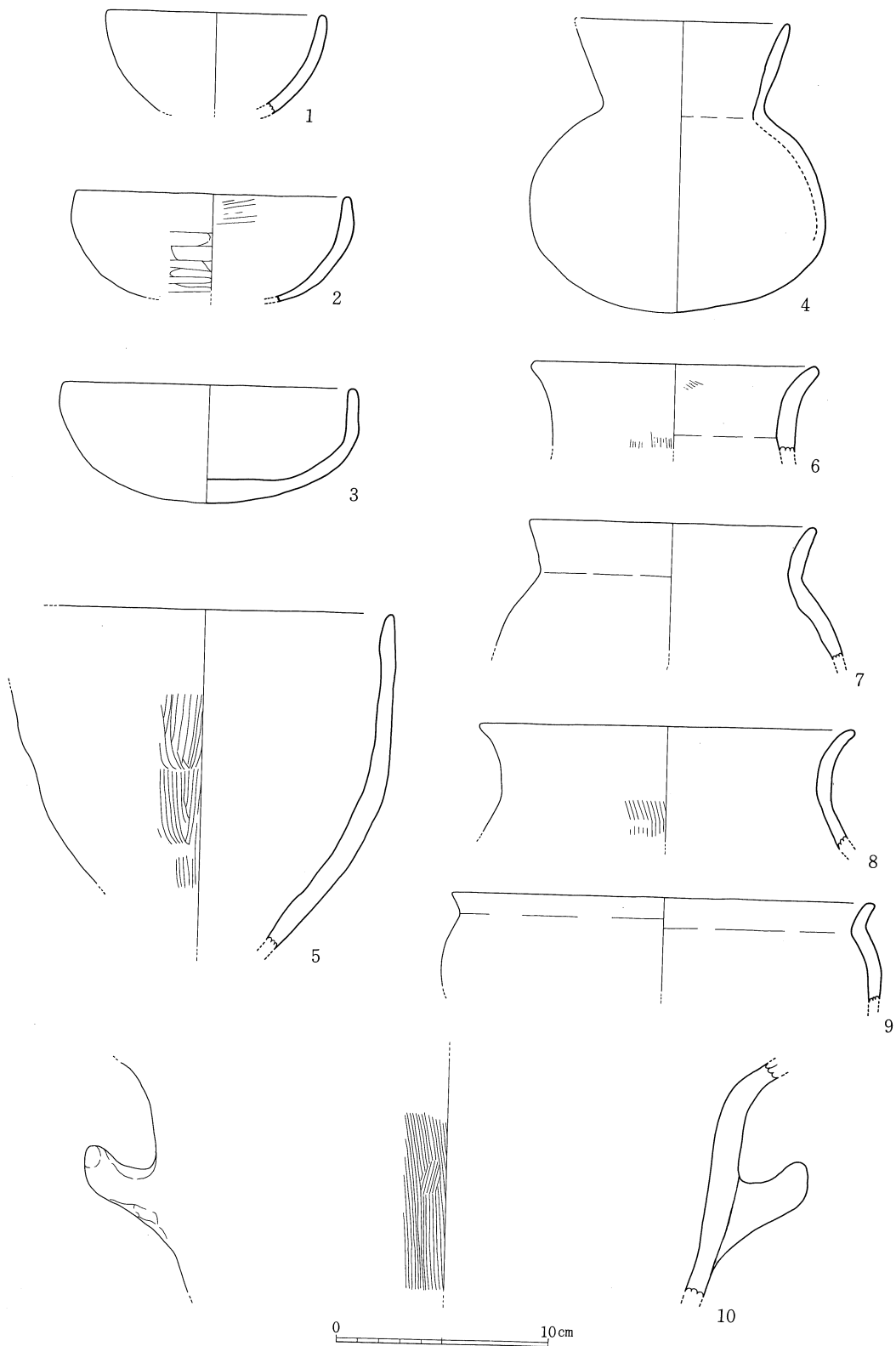
第IV章 検出遺構と遺物

1号竪穴 (第3図)

調査区中央部に位置する方形の竪穴である。竪穴の北壁中央部にはカマドを設置している。竪穴の北・南幅は6.8m、西・東幅は6.6mを呈し、確認面から床面までは約20cmを測る。支柱穴は4本であり、南側の2本には補助柱穴が認められる。竪穴には部分的に壁溝が残存している。



第3図 今村遺跡1号竪穴実測図 (1/60)



第4图 今村遺跡1号竖穴出土遺物実測図 (1/3)

北壁の中央部には横幅90cm、縦幅100cmの方形を呈するカマドが付設されている。カマド内には焼土に混じって土器片等が遺存している。

カマドより南側60cmに、隅丸方形の土坑が付設されている。規模は縦幅125cm、横幅120cmで深さ15cmを測る。

竪穴内には他に柱穴が多数残り、竪穴南壁の一部には焼土も遺存しているが、竪穴との関係は判断できない。

出土遺物 (第4図)

土器

1～3は土師器の碗である。赤彩土器であり、3は口径13.5cm、器高5.4cmを測る。

4は丸底壺であり、口径9.9cm、器高13.5cmを測る。表裏撫で調整。

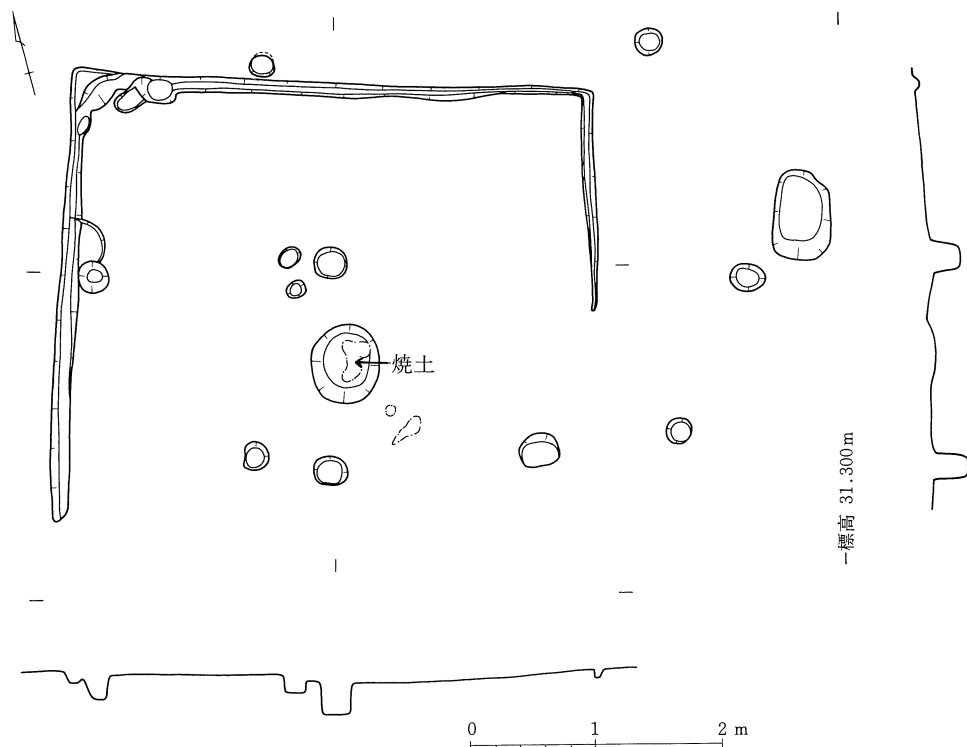
5は甑の破片であろう。

6～9は甕形土器である。表面の一部に刷毛目調整を残し、内面は撫で調整を施す。

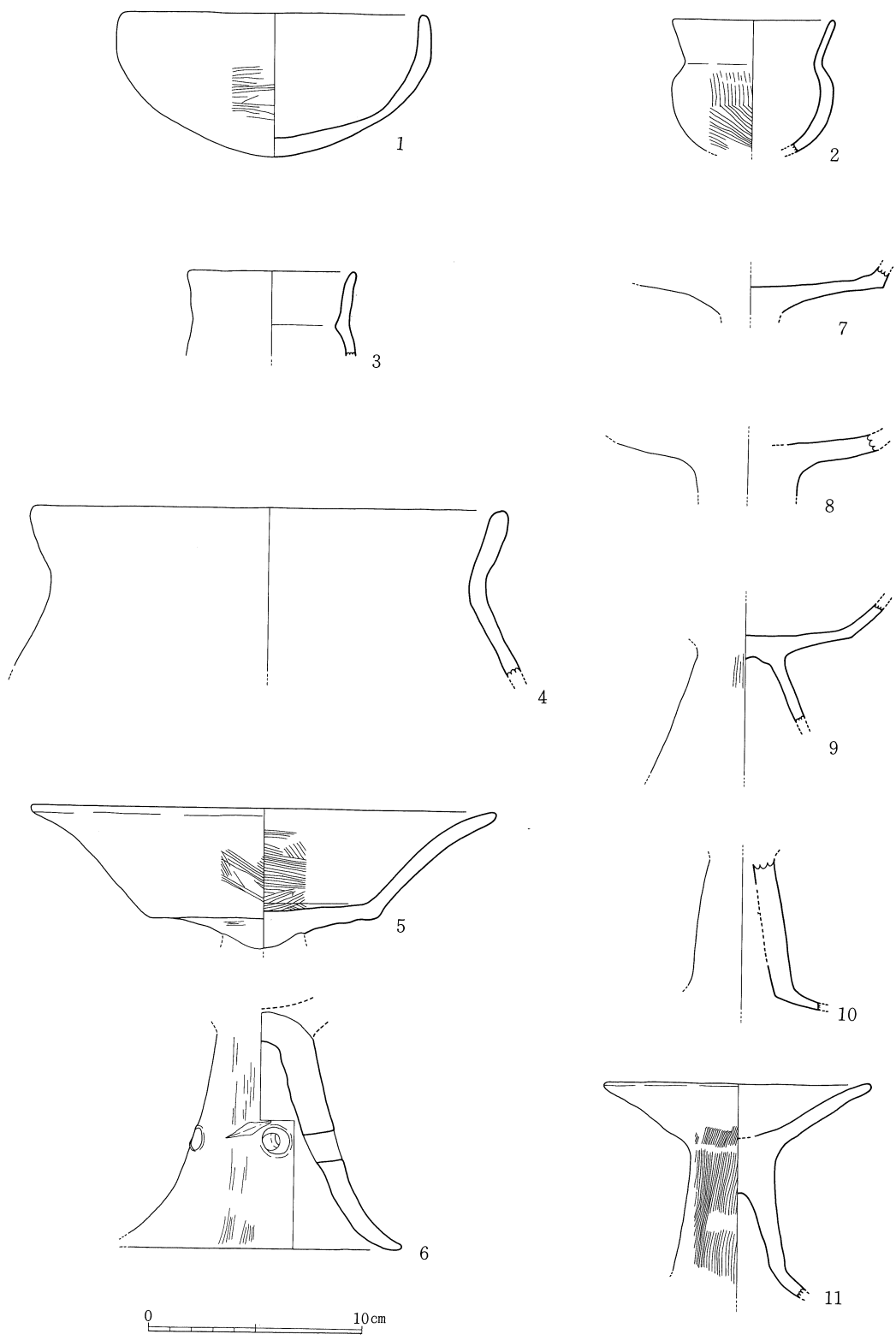
10は把手付きの甑の破片であろう。

2号竪穴 (第5図)

調査区の南西隅部近くに位置する方形竪穴である。竪穴の平面プランは削平されており、僅かに竪穴の北側半分には竪穴の壁溝が残存していた。壁溝は深さ5cm～10cmであり、竪穴の西・



第5図 今村遺跡2号竪穴実測図(1/60)



第6図 今村遺跡2号壜穴出土遺物実測図(1/3)

東径は約4.2mと復元できる。竪穴の北と南に柱穴を持つ2本主柱の竪穴である。柱穴間には長径65cm、短径55cm、深さ10cmの楕円状の土坑炉があり、中に焼土が残っていた。

一方、2号竪穴に重複して、柱穴間が約3m程度の4本柱遺構が観察できるが時期や遺構の実体等は不明である。また、2号竪穴の東側にも縦・横とも3本を基調とした、7本主柱の建物跡らしい遺構も検出できる。

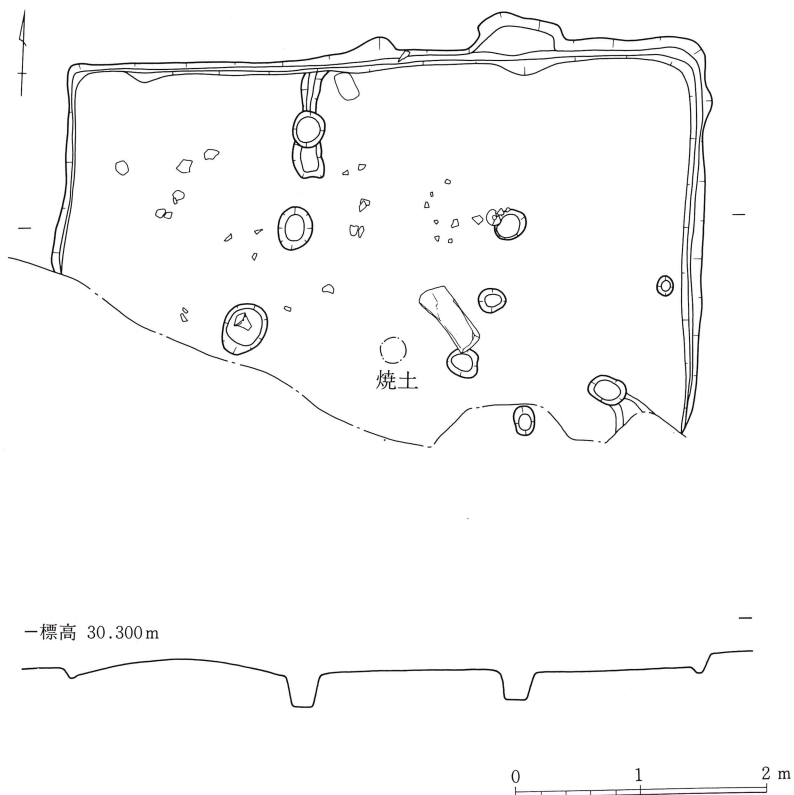
出土遺物 (第6図)

土器

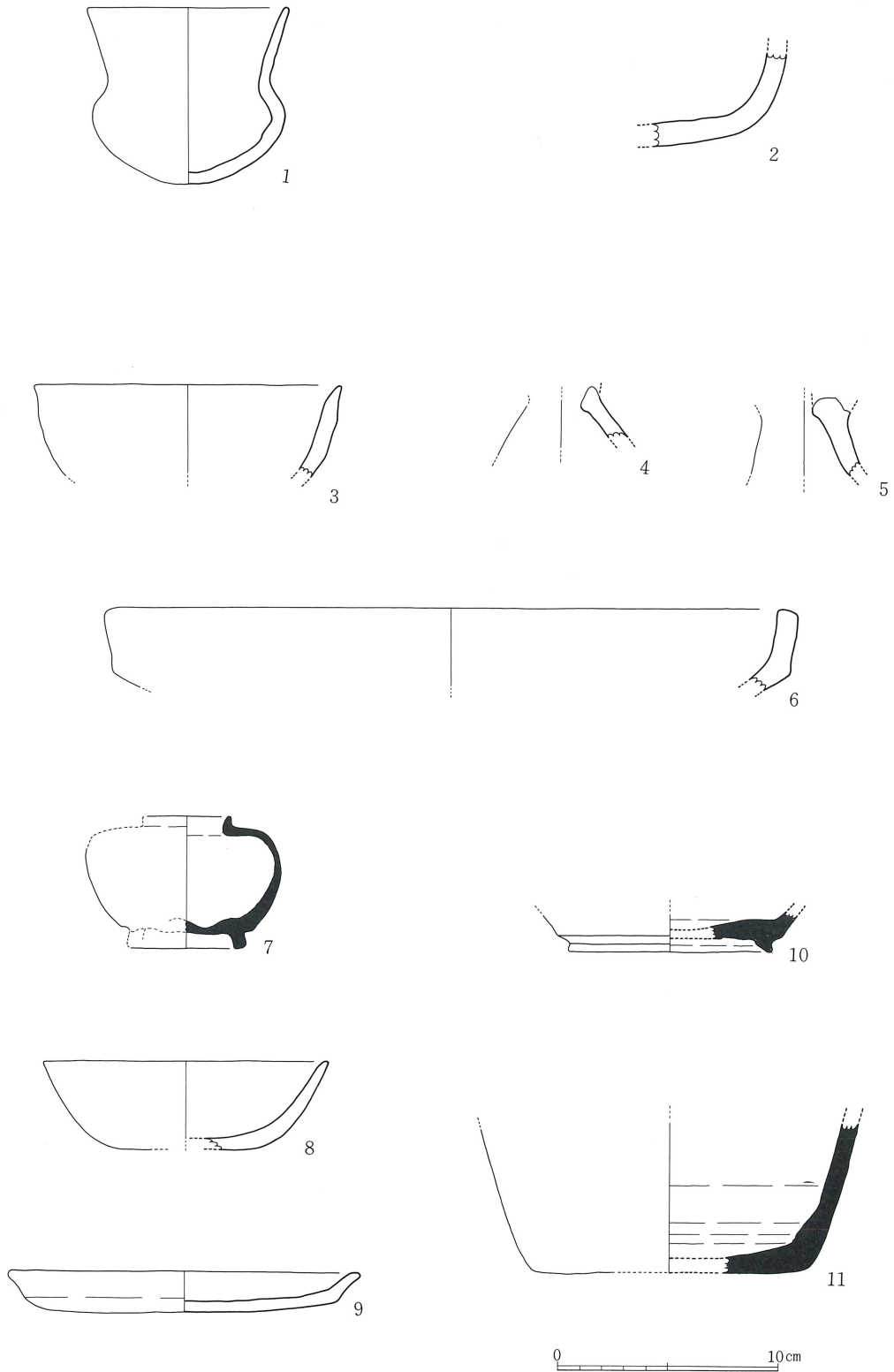
- 1は口径14.1cm、器高6.6cmを測る碗である。
- 2は小型丸底壺、3も同様な形態を呈する。
- 4は甕形土器である。表裏撫で調整。
- 5～11は高杯の坏部と脚部である。6の脚部には円形穿孔がある。

3号竪穴 (第7図)

調査区の南西隅部に残る方形竪穴である。竪穴の南半分は段々畑の造成によって大きく削平されている。竪穴の西・東径は5.2mを測り、検出面から床面までは約15cm程度である。竪穴の周囲には壁溝が巡っている。主柱は4本と考えられ、中央部には径20cm程度の焼土塊が残存



第7図 今村遺跡3号竪穴実測図 (1/60)



第8図 今村遺跡3号竪穴 (1.2) 今村一括出土遺物(3~11)実測図(1/3)

していた。焼土の側には一抱えもある長方形の河原石が据えられている。

出土遺物 (第8図)

土器

1、2は3号竪穴出土遺物である。1は小型丸底壺であり、口径9cm、器高7.8cmを測る。表裏は撫で調整されている。2は底部片の一部である。

表土・包含層出土遺物 (第8～9図)

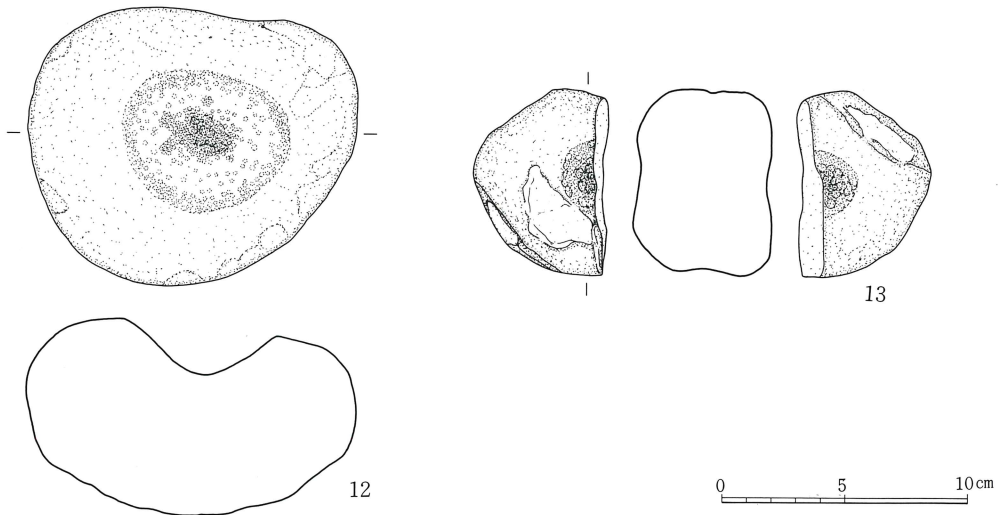
土器

3～11は表土・包含層から出土した土器を一括した。3は碗の口縁部。4、5は高坏脚部である。6は鉢であろう。

7～11は奈良時代末～平安時代初めに位置付けられる遺物である。7、10、11は須恵器。7は小型の壺である。口径3.9cm、器高6cm、胴部最大径は9cmである。8、9は土師器の坏と皿である。8は口径12.9cm、器高3.9cmで表裏撫で調整。9は口径15.9cm、器高1.8cmの皿である。10は高台付きの坏。11は平底部で底径約12cmである。

石器

12、13は凹み石である。12の凹みは太く深い。13は拳大河原礫の表裏に敲打痕を残し、その部分が若干窪まる。



第9図 今村遺跡包含層出土遺物実測図 (1/3)



図版1 今村遺跡1号竪穴(北側より)



図版2 今村遺跡1号竪穴(西側より)



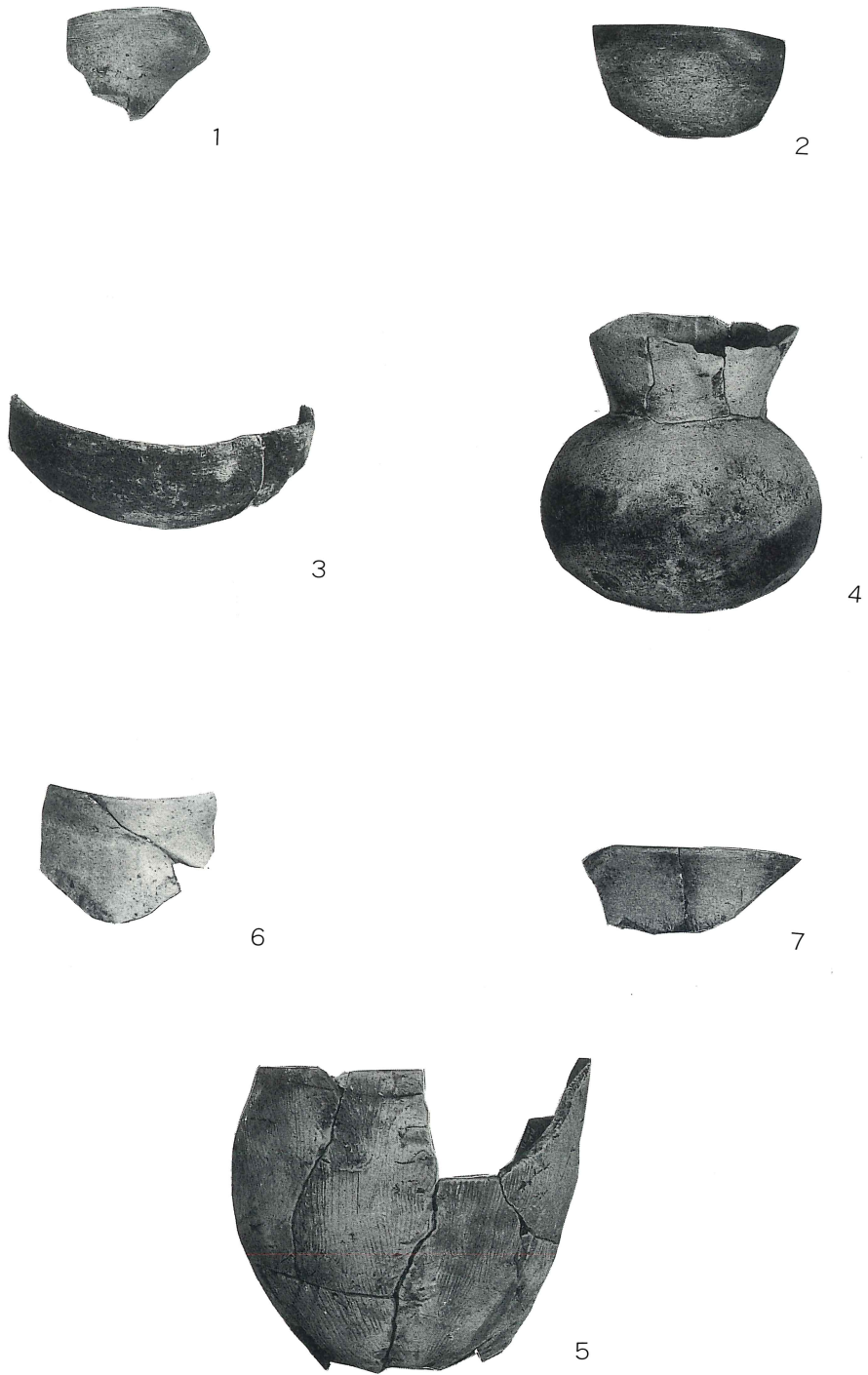
図版3 今村遺跡1号竪穴の竈(北側より)



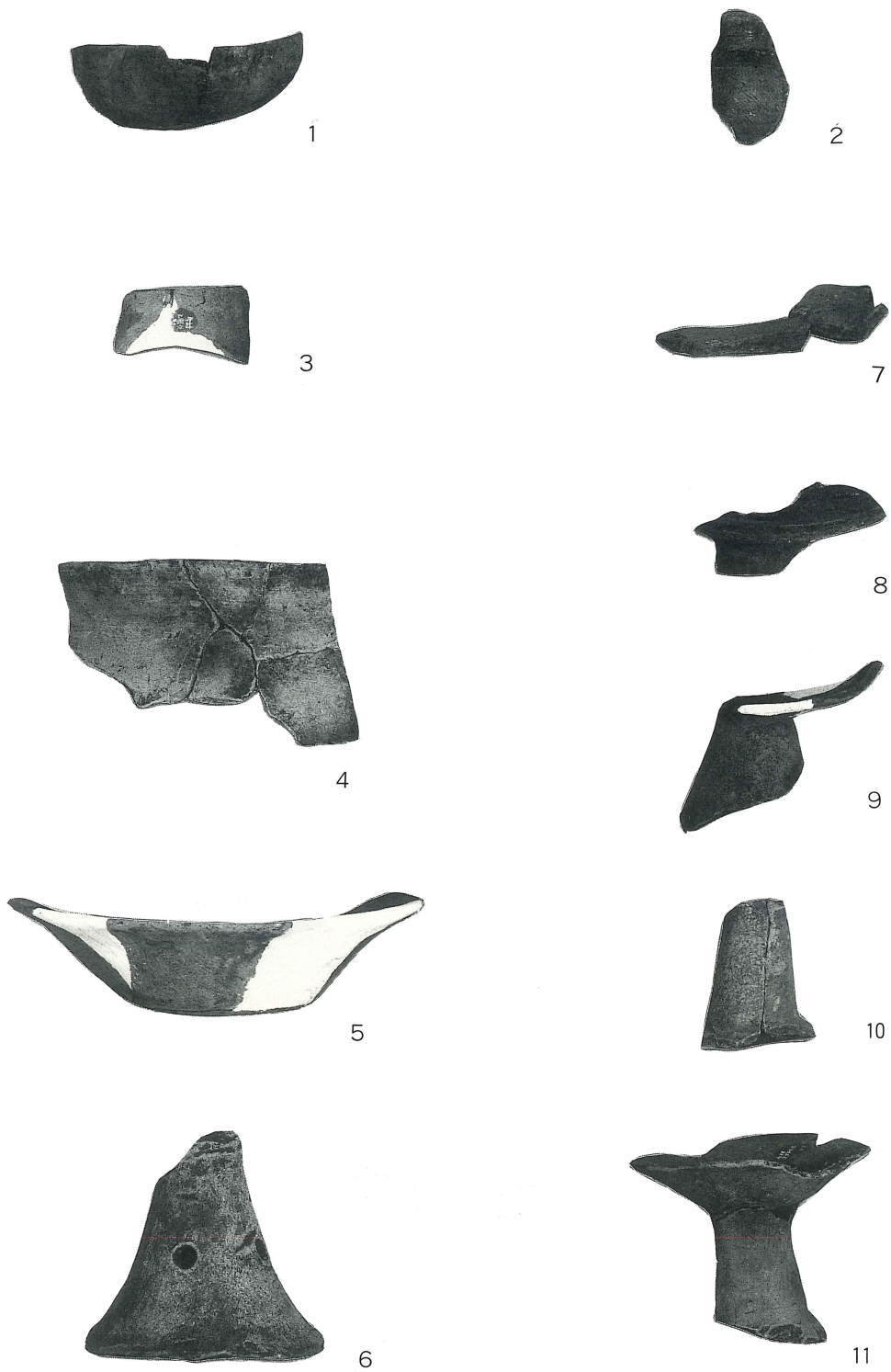
図版4 今村遺跡2号竪穴(西側より)



図版5 今村遺跡3号竪穴(北側より)



图版 6 今村遺跡 1 号竖穴出土遺物



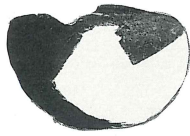
图版 7 今村遺跡 2 号豎穴出土遺物



1



2



7



4



8

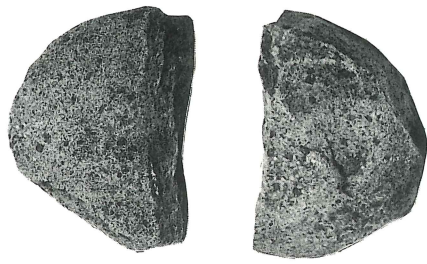


5



9

図版 8 今村遺跡 3号竪穴(1、2)、今村遺跡包含層(4、5、7~9)出土遺物



13



12



図版9 今村遺跡包含層出土遺物

IV 馬 場 尾 遺 跡

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査団の構成	183
1. 調査に至る経過	183
2. 調査団の構成	183
第Ⅱ章 発掘調査の概要	184
1. A区の調査(第2図)	184
2. B区の調査(第15図)	196
第Ⅲ章 まとめ	198

挿図目次

第1図 周辺地形図	184
第2図 A区全体図	185
第3図 角塔婆実測図	187
第4図 角塔婆周辺出土遺物	188
第5図 土坑1実測図	188
第6図 集石1実測図	189
第7図 集石2実測図	189
第8図 土人形実測図	190
第9図 土器、陶磁器実測図(1)	191
第10図 土器、陶磁器実測図(2)	192
第11図 土器 陶磁器実測図(3)	193
第12図 出土銅銭拓影図	194
第13図 縄文土器	195
第14図 石器	196
第15図 B区全体図	197

図版目次

図版 1	A区全景	199
図版 2	A区角塔婆周辺	199
図版 3	A区角塔婆検出状況	199
図版 4	A区石塔類集石状況	200
図版 5	A区庚申塔・巨石検出状況	200
図版 6	A区集石 2	200
図版 7	A区集石	201
図版 8	A区陶磁器出土状況	201
図版 9	B区全景	201
図版10	馬場尾遺跡出土遺物(1)	202
図版11	馬場尾遺跡出土遺物(2)	203
図版12	馬場尾遺跡出土石塔類	204

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査団の構成

1. 調査に至る経過

昭和63年（1988年）度を実施した大分空港高速道路予定地の分布調査の結果、路線内で14箇所⁷の遺跡を確認した。この中で、大分県杵築市大字馬場尾の集落裏手の丘陵上に石塔類が散在する地域が認められた。この地域の北側寄りに1基の方柱状の石塔（角塔婆）が自然石の台座の上に据えられており、付近の住民の話では、触れることも動かすこともタブーとされているとのことであった。また近くには、神木とされていた大木の切株があり、これらの周辺に五輪塔・庚申塔が散在する状況であった。

石製角塔婆以外の石塔類は、一部は原位置を保っているものも見られるが、大多数は散乱に近い状態であった。いずれにしても、この一帯が墓地であるのか、地元の言い伝えによる寺院が存在していたのかどうか、遺跡の性格をつかむ必要があり、このため工事に先立って発掘調査を実施することにした。

試掘調査は、昭和63年（1988年）12月に実施した。丘陵の平坦部にトレンチをコの字状に設定し、表土除去後、人力による検出を行った。その結果、集石らしき遺構と若干の土器片を検出した。このため、次年度に本調査を実施することとした。

本調査は平成元年（1989年）9月中旬から11月末日まで実施した。以下、経過について概要を記す。

9月 調査区一帯の雑木の除去のため、伐開を行った。次いで、一部重機による表土剥ぎを行った。表土除去については、所々に大木の切株があり、それに石塔類が絡まっていたため、検出作業には以外と時間を費やした。一部検出した集石等については、実測を開始した。

10月 石塔、集石の検出、実測を継続する。A区中央やや南西寄りの地点で素焼の土人形出土。続いて調査区東側の境にある石垣の清掃と写真撮影を行った。

11月 遺構の実測作業を継続する。調査区の大半を地山面まで掘り下げたが、一部包含層が残存している部分があり、この地点については掘り下げを継続した。出土遺物・石塔の取り上げを開始した。角塔婆については実測・写真撮影の後、解体し移設した。また自然石の台座の下部を精査したが、特に遺構は検出できなかった。末日には現地調査を終え、撤収を行った。

2. 調査団の構成

調査団については成田尾遺跡の平成元年度の構成と同じである。現地調査については主として清水宗昭（大分県教育庁文化課埋蔵文化財第1係長）と猪薫（同嘱託）が担当した。報告書作成については、吉田寛（同主事）、高島豊（同嘱託）、吉武牧子（同嘱託）、後藤幹彦（同嘱託）、安倍聡子（同嘱託）の協力をえた。

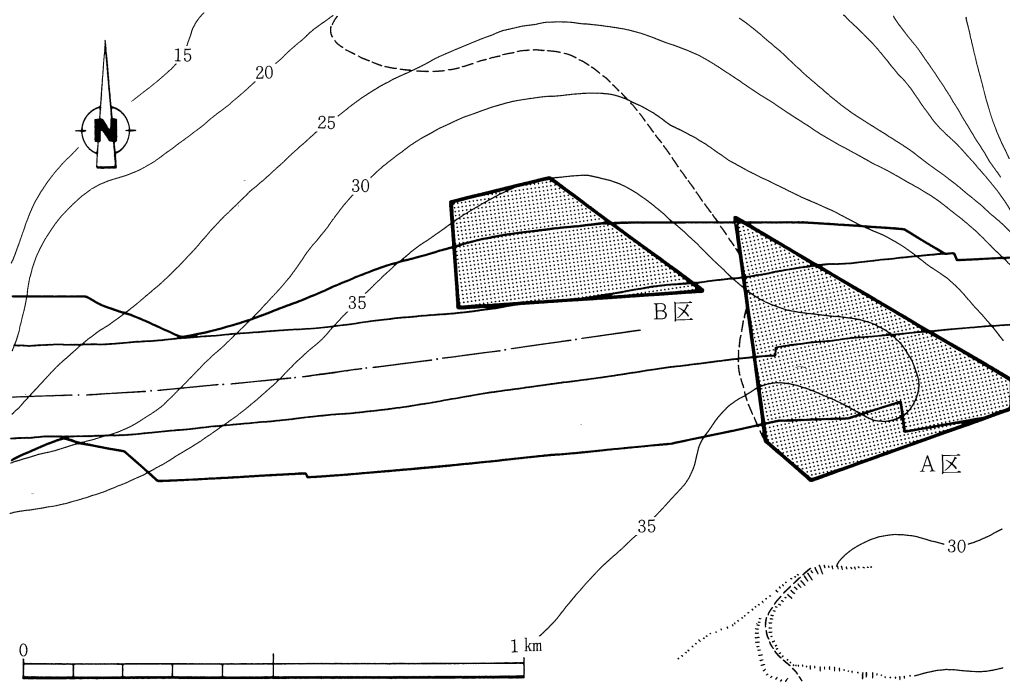
第Ⅱ章 発掘調査の概要

試掘調査の結果に基づき、標高35m付近の平坦部に調査区を2地点設定した。以下、便宜的に東側の調査区をA区、西側の調査区をB区として記述を進める（第1図）。

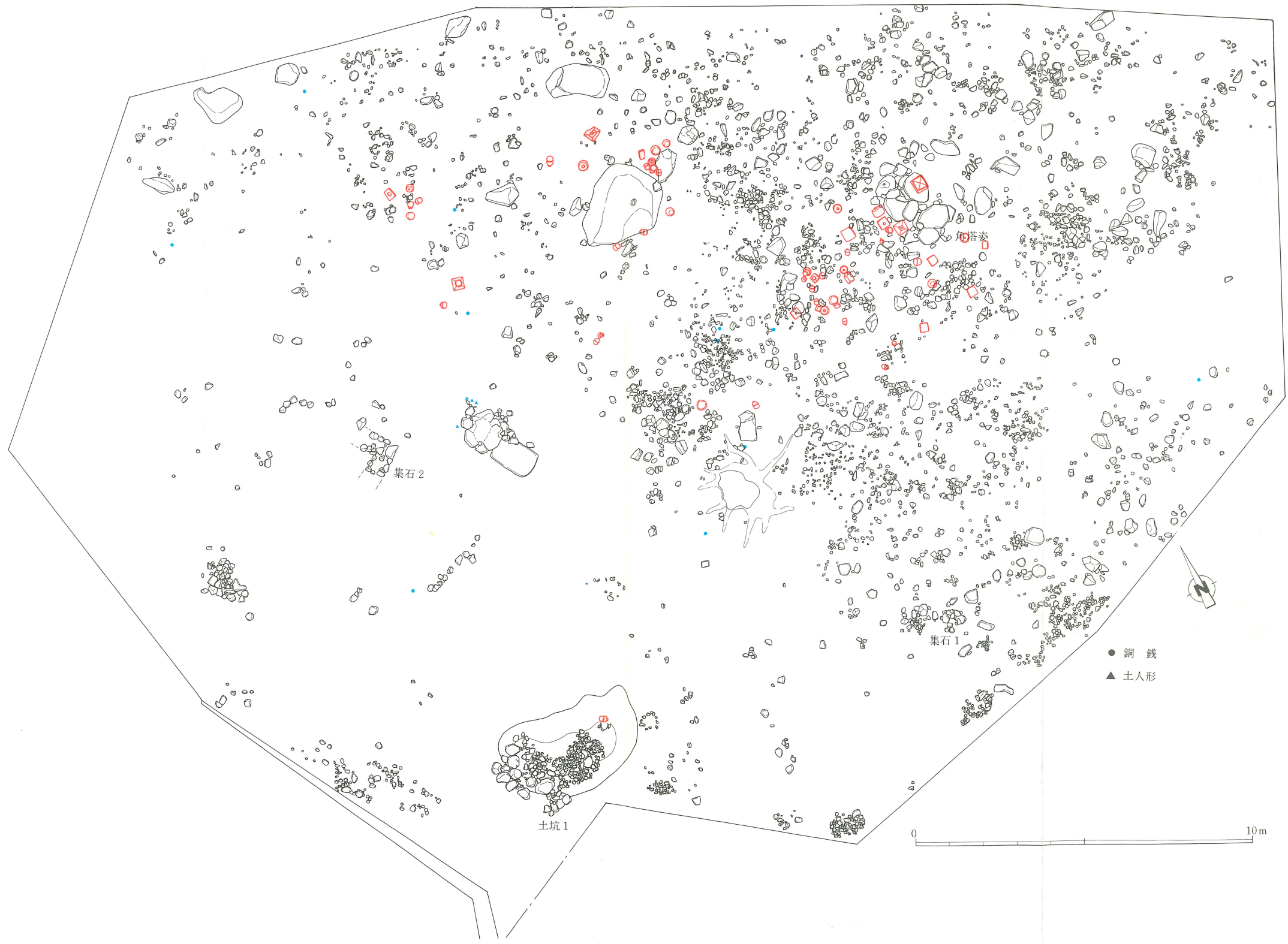
1. A区の調査（第2図）

面積約2,000m²の調査区である。調査区中央北東寄りに角塔婆が自然石の上に設置されており、また神木とされていた木の切株などが存在している。表土下20~30cmで地山に達するが、その途中で五輪塔・庚申塔などの石造物多数や集石遺構、土坑などを検出した。地山面に至るまでの埋土中には銅銭や江戸時代以降の陶磁器などが出土した。石造物以外の出土遺物は、調査面積に比して少量であるといえるが、陶磁器・土器類には中世期に遡るものは認められない。また、調査区中央西寄りには、数個の自然石上面をコンクリートで固定した施設が認められ、その付近で土製の素焼人形4体が出土した。

角塔婆（第3図） 凝灰岩の頭部を山形とし、その下に2条の切り込みを有する角塔婆である。高さ1.1m、最大幅0.44mを測る。長さ約0.9m、幅約0.6mの自然石上に設置されており、そのまわりには多数の自然石をはじめ、石塔の笠部や一部に加工を施した自然石が寄せ集められている。寄せ集められた石の間から土師質土器の破片が出土している。石を撤去した後の地山面を精査したが、土坑などの遺構は検出されなかった。

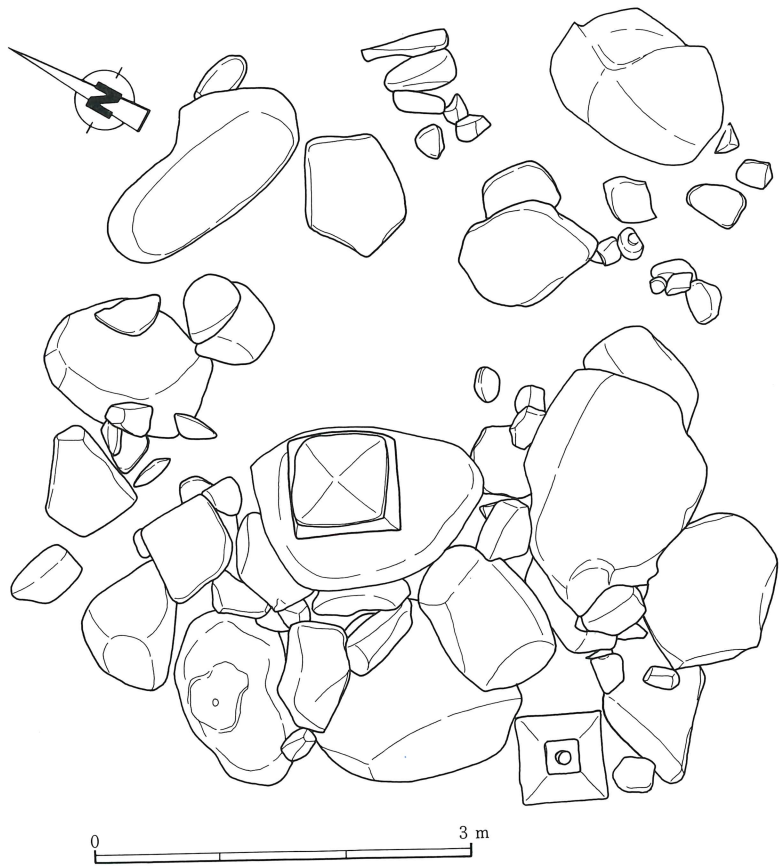


第1図 周辺地形図



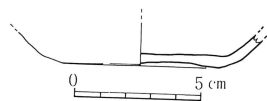
第2図 A区全体図

27.000m



第3図 角塔婆実測図

第4図に図示したものは、角塔婆周辺の自然石の間より出土した土師質土器である。底部に糸切りの痕跡が認められるが、ナデ消されている。時期の特定は不可能であるが、緻密で白っぽい粘土を使用していることや遺構周辺の状況から、中世のものではなく、江戸時代に比定されるものと思われる。



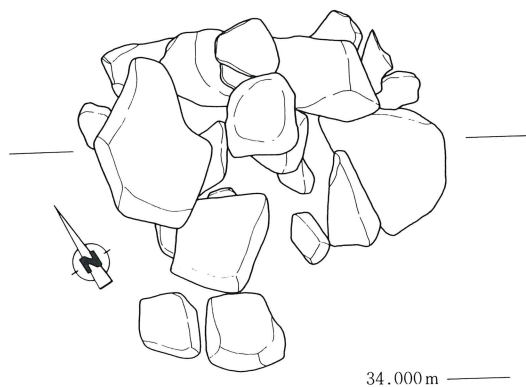
第4図 角塔婆周辺出土遺物

土坑1 (第5図) 最大長 4.1m、最大幅 2.5m、深さ 0.45mを測る不整形の土坑である。土坑床面西側には頭大、中央部には拳大の石が配置された状況で検出されている。また北東隅では五輪塔の風輪・火輪・水輪部分が検出された。埋土中には、小破片のため図示できていないが、19世紀前半から中頃に比定される肥前産の染付や瓦質土器の火鉢などが出土している。また土坑東側に接して、拳大の石が円形に配置されている遺構を検出したが、その性格を明らかにすることはできなかった。

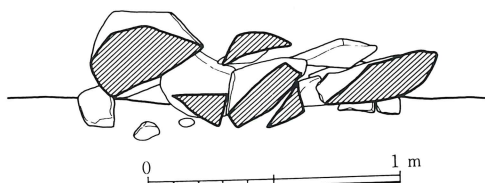


第5図 土坑1 実測図

集石1 (第6図) 頭大ないし拳大の石をいくつか寄せ集めた集石遺構である。寄せ集められた石の範囲は最大長 1.5m、最大幅 1.1mを測る。地元の人々の話ではこの付近は五輪塔などが立て並べられていたということであり、この集石も場合によっては石塔類の台座であった可能性も考えられる。周辺からの出土遺物は認められない。なお、集石除去後地山面を精査したが、土坑などの遺構は検出できなかった。



集石2 (第7図) 頭大ないし拳大の石をいくつか寄せ集めた集石遺構である。集石の平面形態はL字状を呈しており、何らかの建物の基礎の一部であることが推定される。周辺からの出土遺物は認められない。なお集石除去後地山面を精査したが、掘り込み地業などの遺構は検出できなかった。

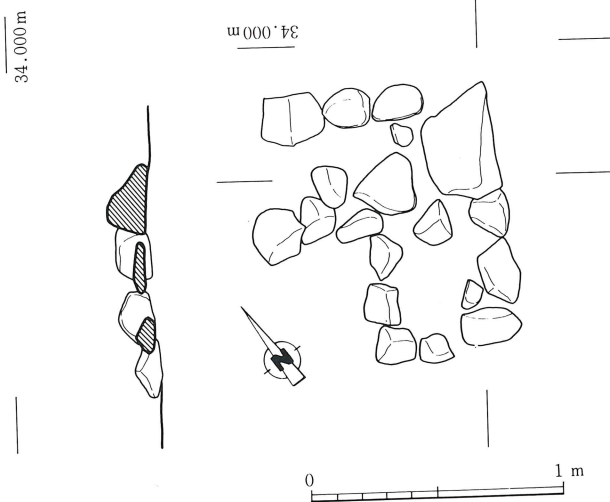


第6図 集石1実測図

A区出土遺物

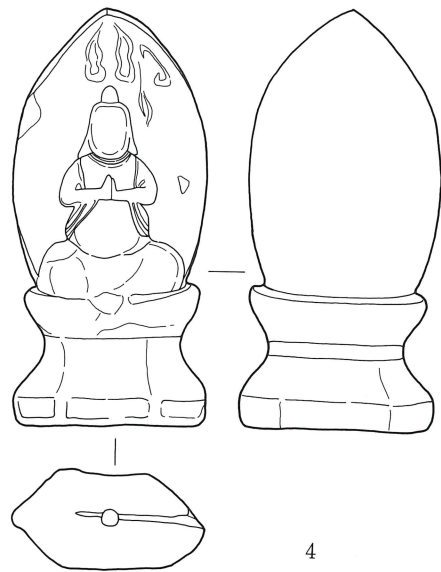
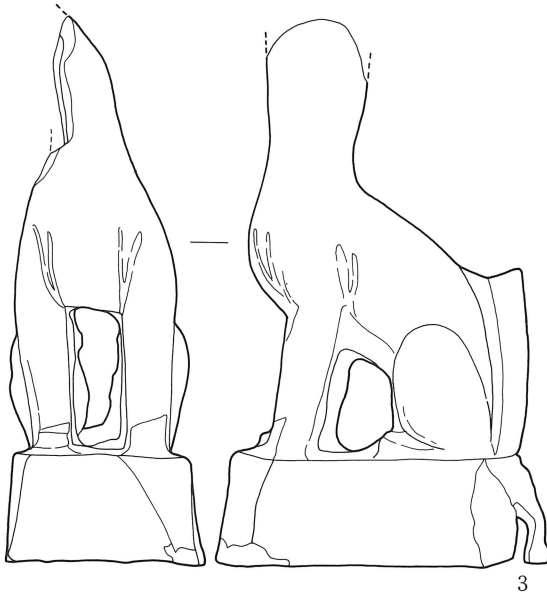
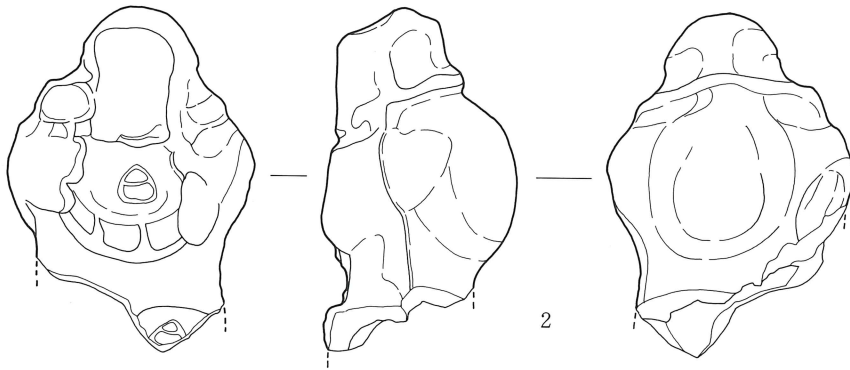
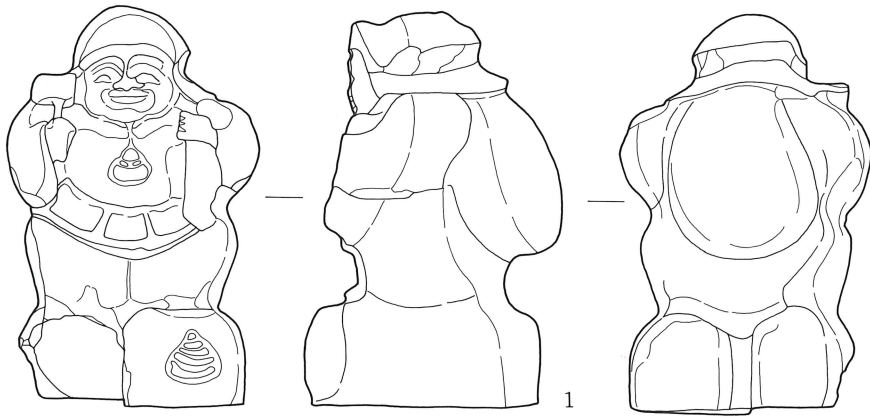
以下、A区およびその周辺で出土した遺物の紹介を行う。

土人形 (第8図) A区中央西寄りに数個の自然石上面をコンクリートで固定した施設が認められ、その付近で土製の素焼人形4体が出土した。1・2は大黒天をかたどったもので、2はやや磨滅しているが、意匠の細部に至るまできわめて類似しており、同一の型で作られた可能性もある。3は稲荷神に関連する狐をかたどったもの。顔部を欠損する。4は仏像をかたどったもの。両手は体の中心部で、合掌している。頭部の宝冠、光背上の化仏、印相などからみて、菩薩形のものである。観音菩薩であろうか。1～4の土人形は

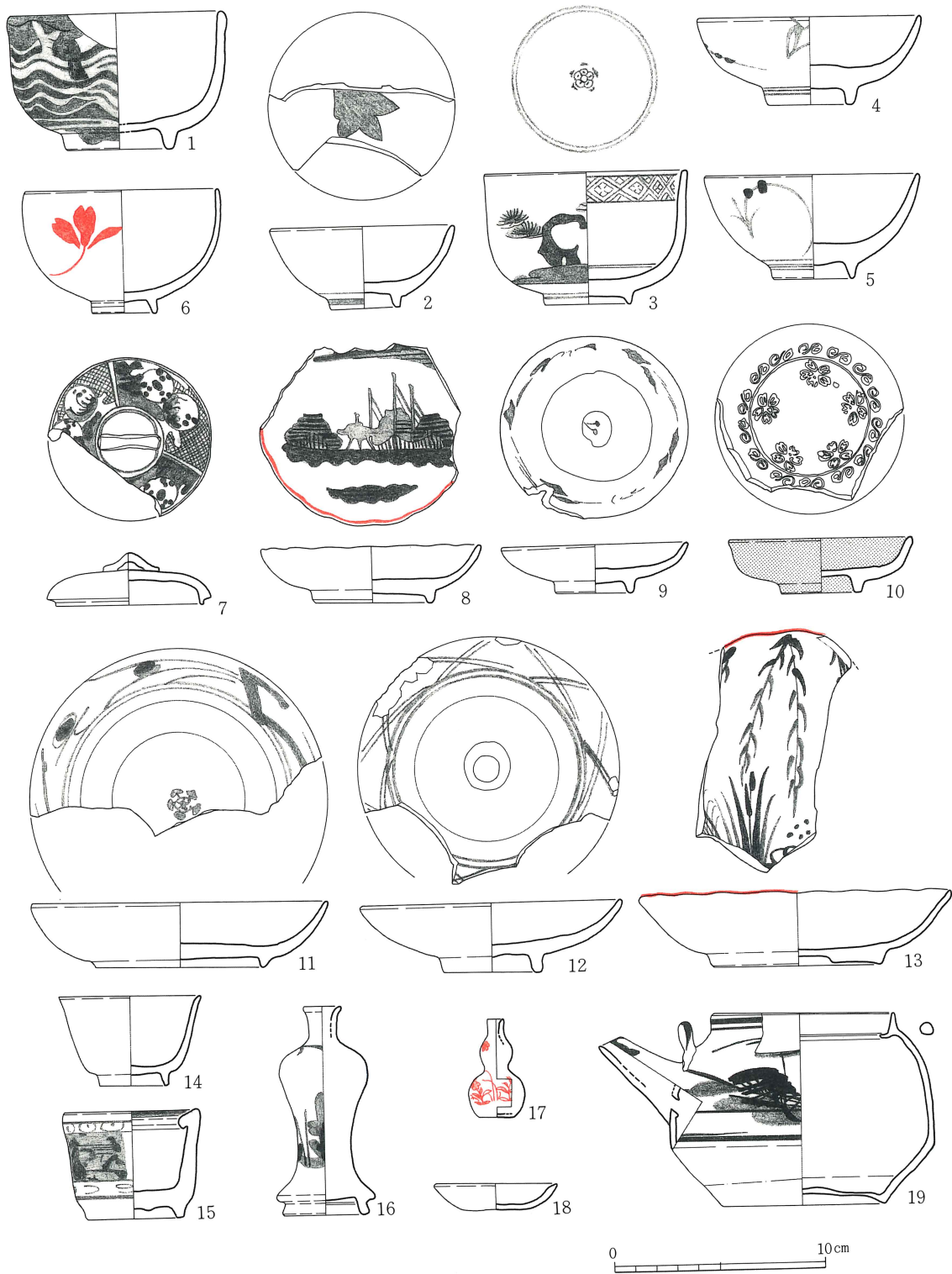


第7図 集石2実測図

り、同一の型で作られた可能性もある。3は稲荷神に関連する狐をかたどったもの。顔部を欠損する。4は仏像をかたどったもの。両手は体の中心部で、合掌している。頭部の宝冠、光背上の化仏、印相などからみて、菩薩形のものである。観音菩薩であろうか。1～4の土人形は



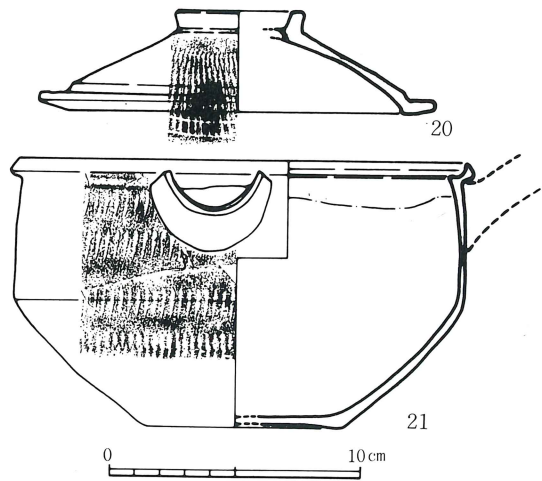
第8図 土人形実測図



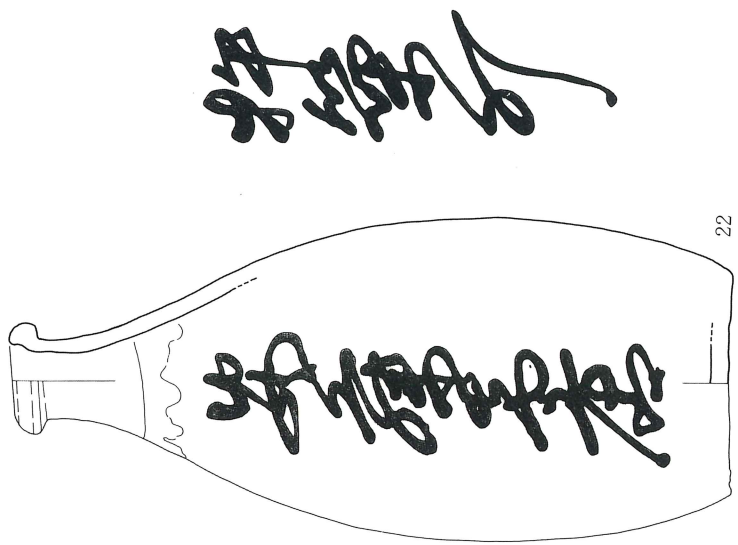
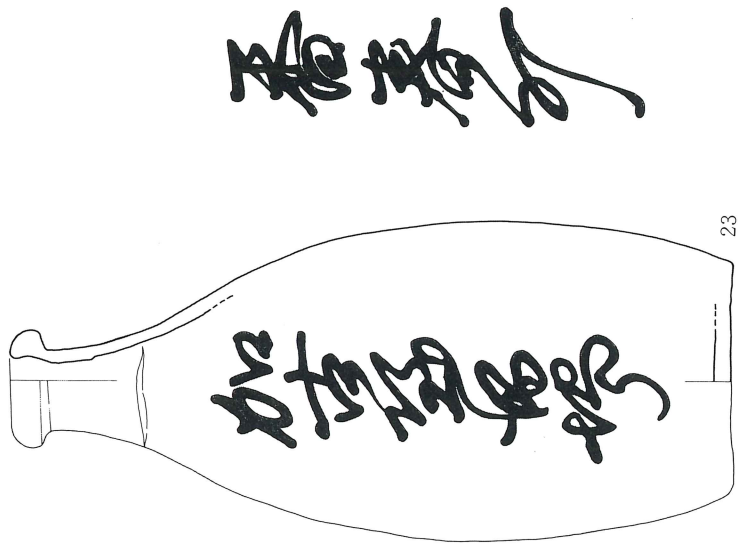
第9图 土器・陶磁器实测图(1)

いずれも合わせ型で製作されており、胎土の表面には型離れを容易に行うための雲母（キララ）が認められる。製作地は不明であり、出土状況からは詳細な年代を確定することは不可能であるが、江戸時代後半以降の所産と思われる。

土器・陶磁器（第9～11図） 1は肥前唐津系陶器刷毛目碗で、18世紀代に比定される。2は肥前染付碗。見込みにコンニャク印判による文様を有する。18世紀中頃に比定される。3は肥前染付碗で、外面に松樹文、口縁内面に四方襷文を有する。見込みには手描きによる五弁花文を有する。18世紀後半に比定される。4・5は肥前染付碗で、外面に梅樹文を描く。4の見込み部分は蛇の目釉剥ぎとなる。いずれもくらわんか手碗と俗称されるもので、18世紀後半の所産である。6は関西系陶器色絵碗で、19世紀前半に比定される。7は肥前染付蓋。外面には丸文を基調とした文様を描かれている。18世紀後半に比定される。9は肥前染付皿。見込みは蛇の目釉剥ぎとなり、19世紀前半に比定される。10は陶器皿で、見込み部分の文様は象嵌技法によるものである。19世紀前半から中頃の所産である。8・11～13は、いずれも18世紀後半に比定される肥前染付皿。11の見込みは蛇の目釉剥ぎとなる。五弁花文はコンニャク印判によるものである。13は内面に菖蒲と柳を描く。高台は蛇の目凹形高台である。14は肥前白磁猪口で、17世紀末から18世紀前半の所産である。15は肥前陶胎染付小鉢で、18世紀後半に比定される。16は肥前染付瓶で、18世紀後半に比定される。17は肥前色絵瓶で、瓢箪をかたどったものである。19世紀前半から中頃に比定される。18は手ツクネ手法による土師質土器小皿（カワラケ）である。詳細な時期を確定できないが、一般的に言ってこの種の手法による土師質土器は17世紀から18世紀中頃に盛行する傾向がある。19は関西系陶器急須で、明治時代前半（19世紀後半）の所産である。20は陶器蓋で、行平の蓋になるものと思われる。外面には飛びガンナが認められる。18世紀末から19世紀中頃に比定される。21は陶器行平で把手を欠損する。外面にはやはり飛びガンナが認められ、18世紀末から19世紀中頃に比定される。22・23は陶器徳利で、同一技法・同一形態のものである。22の外面には酒屋の屋号と思われる記号のほか、「安藤寄店」「杵築町」の文字がみられる。23の外面には「加古屋酒場」「香春町」の文字は認められるが、屋号と思われる記号は描かれていない。容量からみて、一升徳利と呼ばれるものである。明治時代前半代（19世紀後半）の所産である。



第10図 土器・陶磁器実測図（2）



第11图 土器・陶磁器実測図(3)



1. 寛永通宝



2. 寛永通宝



3. 寛永通宝



4. 寛永通宝



5. 寛永通宝



6. 祥符□宝



7. 天禧通宝



8. 元豊通宝



9. 元豊通宝



10. 元祐通宝



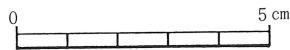
11. 洪武通宝



12. 判読不明



13. 判読不明



第12図 出土銅銭拓影図

銅銭（第12図） 馬場尾遺跡の出土貨幣は江戸幕府の公鑄貨である寛永通寶が5枚、渡来銭が6枚、判読不明銭が2枚の総数13枚である。1～5は寛永通寶である。寛永通寶は一般に古寛永銭と新寛永銭に分類されており、古寛永銭とは寛永3年(1626)から寛文8年(1668)の間に鑄造された銅銭で、新寛永銭とは寛文8年(1668)に幕府直轄で鑄造された文銭（背に文の刻字

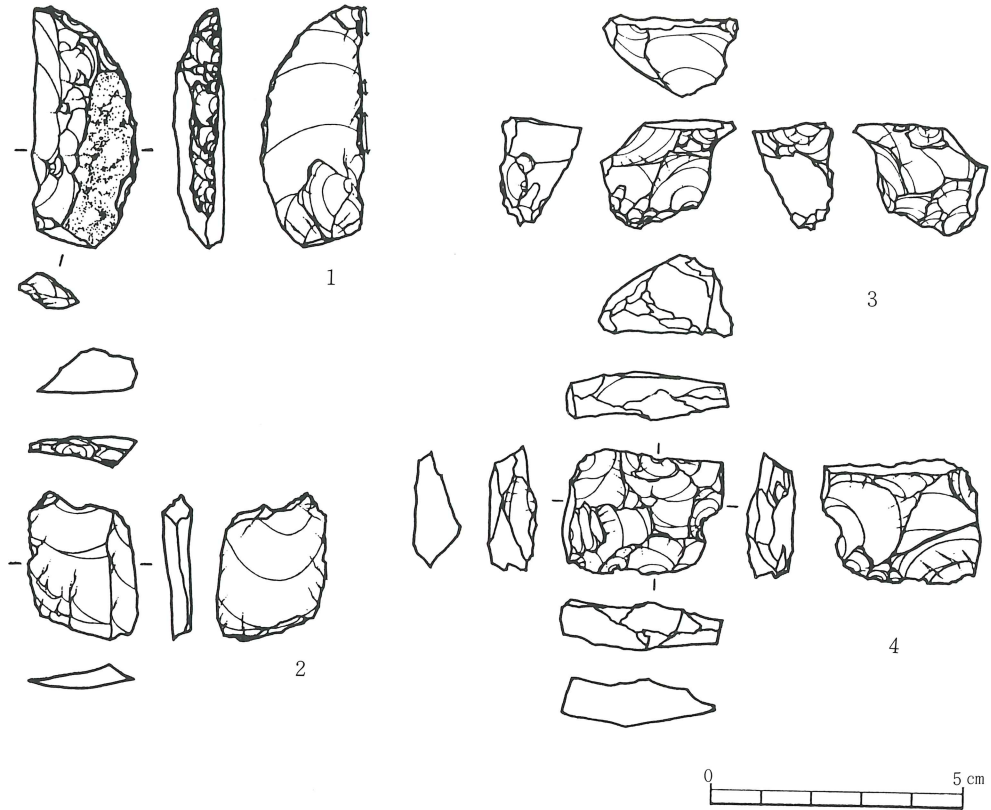
があるもの)をはじめとして約200年間鑄造された銅銭と鉄銭である。1は新寛永銭であるが、鑄造地や初鑄年は不明である。2は一般に文銭と呼ばれているもので、寛文8年(1668)武蔵国亀戸村のみで鑄造された銭貨である。3は新寛永銭であるが、鑄造地や初鑄年は不明である。4は新寛永銭であり、通の旁上部がコではなくマの形に見えるもので、一般にマ頭通といわれるものである。鑄造地は不明であるが、鹿児島県王城古墓において1701~1721年の紀年を持つ未攪乱の墓よりの出土が確認されているので、初鑄年は1701年以前であることは確実である。5は新寛永銭であるが、鑄造地や初鑄年は不明である。6~11は渡来銭である。6は祥符元寶もしくは通寶で、鑄造国は北宋である。初鑄年は大中祥符元年(1008)もしくは大中祥符2年(1009)である。7は天禧通寶で、鑄造国は北宋である。初鑄年は天禧年間(1017~1021)である。8・9は元豊通寶で、鑄造国は北宋である。初鑄年は元豊元年(1078)で、わが国で最も流行した渡来銭のひとつである。10は元祐通寶で鑄造国は北宋であり、初鑄年は元祐元年(1086)である。11は洪武通寶であり鑄造国は明であり、初鑄年は洪武元年(1368)である。12・13は判読不能である。現状では刻字の痕跡が認められず、模造銭である可能性も考えられる。馬場尾遺跡の成立年代は、他の出土遺物より江戸時代以降と考えられており、出土銭貨の初鑄年代などとも矛盾するものではない。しかし銭貨のすべてが表土からの出土であることを考えると、遺構との直接的な関連性は低い。また特に渡来銭については、新寛永銭との間に存在する古寛永銭が全く含まれていないことや新寛永銭と比較して保存状態がよくないことから、本遺跡との関連性自体が低く、中世期に何らかの理由で遺棄されたものが混入したものと考えられる。

縄文土器 (第13図) 表土中より、図示した縄文土器が採集されている。1・2とも深鉢の口縁部の破片で、内外面とも条痕が施されている。小破片のため時期の特定は困難であるが、晩期のものであると思われる。



第13図 縄文土器

石器 (第14図) 表土中より、図示した石器が採集されている。1は縦長剝片製のナイフ形石器である。調整加工は背面右側縁に素材を斜めに切断するように加えられており、弧状の背部が形成されている。背面は自然面と左からの大きな一枚のネガティブ面で構成される。なお、打面は残置されている。石材は、珪質頁岩様の岩石である。長さ4.7cm、幅2.1cm、厚さ1.1cm。2は玉髓製の縦長剝片である。折面部と末端部は、折損しているが風化は古い。前者にはさらに背面からの剝離が加わっているが、意図的なものであるか否かは判断し難い。背面は腹面側と同方向の2枚の面で構成されており、石材の点を考慮すれば、旧石器時代の所産である可能



第14図 石器

性であろう。3は赤色チャート製の石核で、打面や作業面を頻繁に転移しながら寸ずまりの剥片が剥取されたものである。4は姫島産黒耀石製の石核である。全周の両面で、打面と作業面を交替させながら、寸ずまりの剥片が剥取されている。3・4は縄文時代の所産であろうと思われる。

2. B区の調査 (第15図)

面積約 700m²の調査区である。調査区全体からはいくつかの集石的な石の集まりがみられるが、遺構として明確な形状をなすものは少ない。調査区の北側に接して、五輪塔や江戸時代の墓標などが寄せ集められている場所があり、また付近には最近の墓も造営されている。調査区内で検出された集石的な石も墳墓に関連する可能性があるが、地山面を精査しても墓坑などが検出されず、断定できない。出土遺物としては、表土中で若干の近世陶磁器を検出したほかは、目立ったものはない。



第15図 B区全体図

第Ⅲ章 まとめ

馬場尾遺跡は、近世に造営された遺跡である。検出された五輪塔類や角塔婆などは、その形状からみて、当然その製作年代は近世以前に遡るものとみてよい。しかし石塔類以外の出土遺物には、旧石器や縄文土器は別として、数枚の銅銭を除き、中世期に遡るものはなく、近世それも18世紀後半以降の遺物が主体を占める。表土中から検出される土器・陶磁器類の中には17世紀後半から18世紀前半に遡る遺物があり、遺跡の成立年代がこの時期までは遡るとしても、主体となる出土遺物は18世紀後半以降幕末のものが多いことは動かない。従って、石塔類自体の製作年代が中世に遡るとしても、石塔類が当遺跡付近に寄せ集められ、発掘調査完了時のような景観を示すようになるのは、近世中頃以降のことであろう。自然石上に据えられている角塔婆も、製作年代は近世以前に遡るものであるのかも知れないが、現位置に設置されたのは近世中頃以降であると判断される。

馬場尾遺跡で検出された集石状の石組のいくつかは、墳墓に関わるものである可能性を否定できないし、実際に付近からは原位置を離れた墓標なども採集されている。ただしA区の中央部分一角塔婆や神木などが存在した地点周辺には、発掘調査の所見では墓坑などの遺構が存在していた痕跡はなく、この地点に原位置を離れた石塔類が特に集中していることや土人形、近世陶磁器などの出土遺物が集中していることが指摘される。従って、当該地点付近は埋葬を行う場所ではなく、なんらかの象徴的な意味を持つ空間であったことが注意される。通常墓の副葬品として出土することが多い土人形も、この遺跡の場合では本来副葬品であったものが遊離したのではなく、象徴的な意味を持つ空間に供えられたササゲモノー供物としての性格を有するものであることを確認しておきたい。

馬場尾遺跡からは石塔類が多数出土している。今回は時間的な制約から、石塔類に関する検討をほとんど行っておらず、また提示した資料もきわめて少数である。出土遺物の大多数を占める石塔類を検討せずに、この遺跡の性格を正確に語ることはできず、不十分なものとなってしまった。これらの点については、機会があれば後日を期すこととしたい。



図版1 A区全景



図版2 A区角塔婆周辺
(試掘前)



図版3 A区角塔婆検出状況



图版 4 A区石塔類
集石狀況



图版 5 A区庚申塔・
巨石検出狀況



图版 6 A区集石 2

図版7 A区集石
(この周辺から土人形
が出土している。)



図版8 A区陶磁器
出土状況



図版9 B区全景





図版10 馬場尾遺跡出土遺物(1)



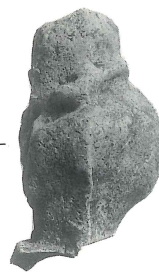
11-22



11-23



8-1



8-2

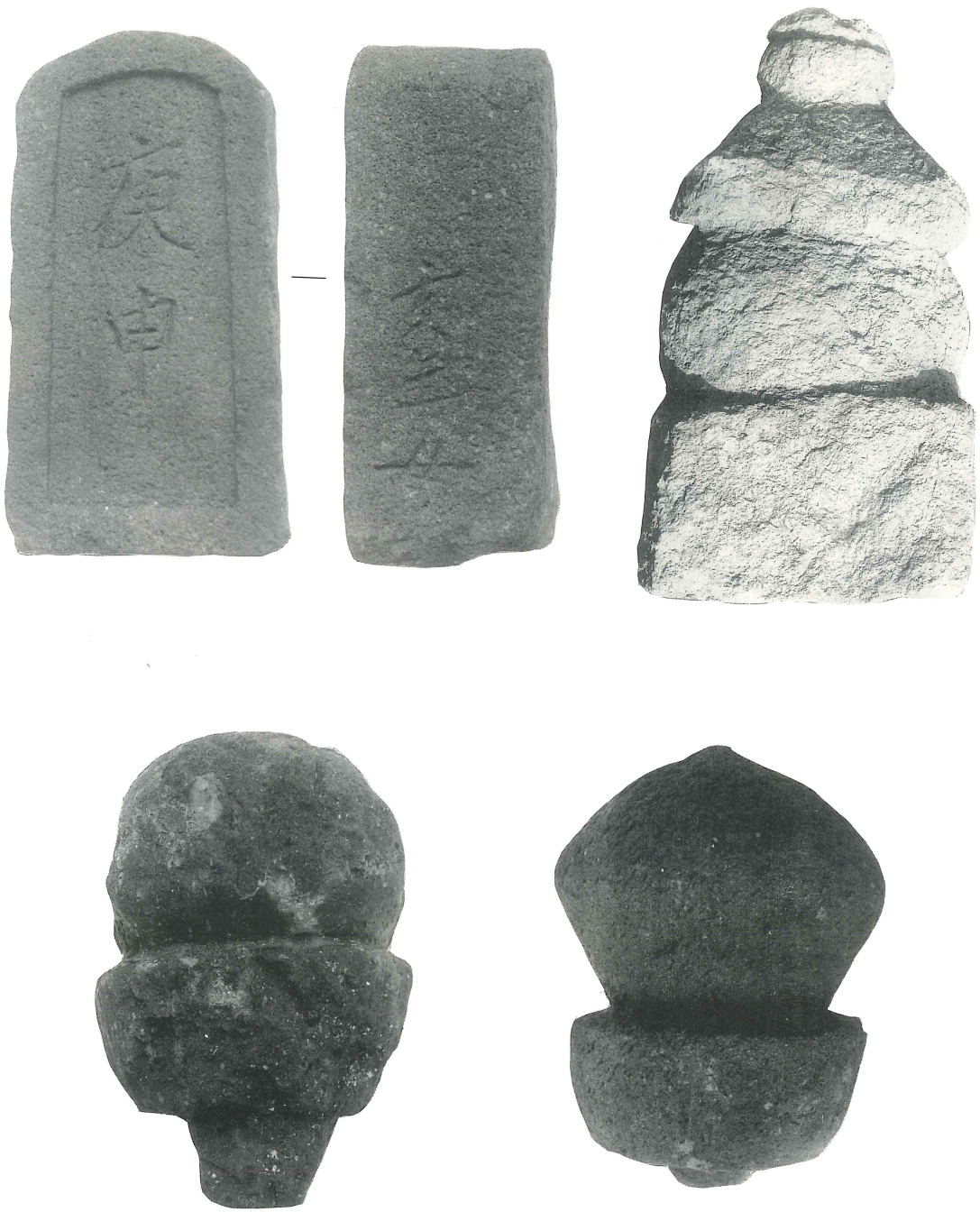


8-4



8-3

図版11 馬場尾遺跡出土遺物(2)



図版12 馬場尾遺跡出土石塔類

成田尾遺跡、今村遺跡、馬場尾遺跡

大分空港道路建設に伴う
発掘調査報告書 II

大分県文化財調査報告書
第88輯

1992年3月31日

発行 大分県教育委員会
大分市府内町3丁目10番1号
印刷 日の丸印刷株式会社